

# スコットランド毛織物工業史

— ツィード織をめぐる —

History of Scottish Woollen Industry

— On Observation of Scottish Tweeds —

北 政 巳

Masami Kita

- |                |                |
|----------------|----------------|
| I はじめに         | V 19世紀後半の毛織物工業 |
| II 合併前夜の毛織物工業  | — ツィード織の登場 —   |
| III 合併と毛織物工業   | VI 結 び         |
| IV 産業革命期の毛織物工業 |                |

## I はじめに

イギリスの羊毛・毛織物工業の研究については、角山栄『イギリス毛織物工業史』（ミネルヴァ書房、1960年）、船山栄一『イギリスにおける経済構成の転換』（未来社、1967年）等の代表的な研究を始め、幾多の労作がある。全般的な毛織物業の技術史の変革はともかくとして、厳密に言えば、従来の研究は全てイングランドの羊毛・毛織物工業史に集中しており、連合王国（United Kingdom）の一方であるスコットランドの羊毛・毛織物については全く触れられていない現状である。

私が本稿でスコットランドの羊毛・毛織物工業を扱う意図は、1707年のイングランドとの合併後、スコットランド工業化過程における繊維（毛織物、亜麻、木綿）工業の果たした役割を究明する第一段階としてである。また現代的な関心からみれば、有名な「スコットランドのツィード織」工業の成立・発展につ

いても興味のあるところである。

勿論、イギリス資本主義の主導した世界資本主義確立の原動力が木綿工業にあったのは事実である。そしてスコットランド繊維工業史研究の目的は、このイギリス木綿工業におけるスコットランド木綿工業がどのような位置にあったのか、またスコットランド地域内での他の繊維工業とどのように関連していたのかの究明にある。しかしイングランド社会経済史研究とは異なり、スコットランドのそれは資料にも乏しく木開拓な分野のゆえに、自づから諸繊維工業を研究しなければならないという難題が横たわっている。

本稿では、イングランドの初期資本主義の代表的工業である羊毛・毛織物工業との比較の観点も入れ、合併前後から19世紀後半の輝く繁栄に至るまでのスコットランドの羊毛・毛織物工業を中心に、スコットランド社会経済史を究明してゆきたい。

## II 合併前夜の毛織物工業

スコットランドのジェームス6世は、1603年のエリザベス女王の死後、王位を継承してイギリス王に即位した。この合併は、「王冠の結合」と呼ばれたが、イングランドとスコットランドは社会経済の点では未だ異国の状態にあったのである。

当時のイングランドは、高度な熟練労働者の集中的雇用と発展した商・工業組織により羊毛加工業に成功していた。<sup>1)</sup>そして羊毛・毛織物生産品は、イングランドのヨーロッパ貿易の約80%を占めていた。

一方スコットランドでは、後進国経済を反映して毛織物工業も充分な発達をみることなく、17世紀を通じて国内需要が供給量を上廻ることもなくて、第一次産品の原毛輸出に専業していた。<sup>2)</sup>その理由には、羊毛がスコットランドの希少な天然資源であったことと、外貨獲得の簡便な手段となりえたからである。そして一方では原毛を輸出しながらも、また他方では高級毛織物に対する商人・地主階級の需要には、イングランドやオランダからの輸入によって満していた。<sup>3)</sup>

また17世紀の末には、イングランドとスコットランドの経済力格差からの摩擦は激化しつつあり、羊毛通商が紛争の中心となった。何故ならスコットランドは、地理上からみてもアイルランド、北西ヨーロッパ、アメリカ

新大陸の諸市場にも近く商業上の優位にあったこと、また密輸業者がイングランド市場へ入るのにスコットランド経由を用いていたことからである。貿易量については定かではないが、概数を見ると1614年の羊毛輸出量(額)は10,000ストーン(50,000ポンド)であった。それが1698年にはフランス向け輸出だけでも年36,000ストーン(1ストーンは24ポンド)に達する。<sup>4)</sup>

それゆえ当然、スコットランドの羊毛輸出への干渉は高まった。例えば1616年に、イングランドのマーチャント・アドベンチャラーズは、イングランドの羊毛がスコットランド諸港を経由して流出し、それが海外諸国のライバル毛織物工業を助長していることを弾劾した。さらに1622年、1632年法により、イングランド議会はスコットランドへの羊毛輸出を禁止した。その後何回となく、禁令と撤廃を繰り返したが、最終的には1699年のイングランド法、1701年のスコットランド法によって両国とも羊毛の外国輸出を禁止した。しかしスコットランド国境を越えるイングランド産羊毛の流れは絶え間なかった。<sup>5)</sup>

無論、スコットランドの羊毛・毛織物工業の中にあっても利害の対立がない訳ではなかった。大別しても粗毛織物(coarse woollen)

4) T. Keith, *Commercial Relations of England and Scotland 1603-1707*, Cambridge, 1910, p. 2. また17世紀スコットランドの貿易については、スコットランド諸大学の共同研究の成果として *Records of the House of Glasgow 1605-1678*, 1909 が発表されている。

5) 特に宗教改革の後、羊毛・毛織物工業は一時的に衰退したが、再び興隆した。また合併前夜になると、スコットランドの羊がイングランド社会の食料供給源となりつつあった。食用羊の市場と交易については、A. R. Haldane, *The Drove Roads of Scotland* Edinburgh, 1968: に詳しい。

1) W. E. Minchinton (ed.) *The Growth of English Overseas Trade*, 1969, p. 18.

2) S. G. Lythe, *Economy of Scotland 1550-1625*, Edinburgh, 1960, pp. 38, 83-4.

3) T. C. Smout, *Trade on the Eve of Union*. Edinburgh, 1963, p. 191.

生産と高級毛織物 (fine woollen) 生産がある。前者はスコットランド土着の羊毛と労働を用いており、かなりの量をヨーロッパ大陸、主してバルト海地方諸国に、若干を新大陸プランテーションへ販売した。<sup>6)</sup> 品質は劣等であるが、廉価な労働力のゆえに、先進技術と大企業経営のイングランド毛織物工業にも対抗できた。後者は商人・貴族需要の高級織物を専業としたことから、劣質のスコットランド産羊毛を使わずにイングランドやスペイン産の高級羊毛を用いた。

スコットランド議会は、両者の利害の対立に対して、重商主義的見地から、雇用機会の増大と国富の増大をはかるため、羊毛加工業の振興を計る製造工業規制に着手したが、原毛供給者からの反対、外貨の慢性的な不足、関税決済の脆弱さから、その政策は挫折した。それゆえ高級織物はスコットランドでは成功せず、国内需要を越える羊毛は輸出された。当時、スウェーデンとフランスは、スコットランド羊毛を輸入して、自国の毛織物工業の振興に積極策をとっていた。<sup>7)</sup>

ここでスコットランド毛織物工業の技術導入の過程をのべておきたい。

1582年に、スコットランド議会は、フレミング (Flemings) の熟練工を招聘してファスティアン織、サージ織その他をスコットランド労働者に教えることを決定した。しかし1599年には都市 (burgh) の職工は彼ら自身の特権喪失を恐れて反対し、移入民は禁止さ

れるに至る。<sup>8)</sup> それ故、その大半は1609年に帰国したが、一群のグループはエディンバラに居住し、その後のスコットランド毛織物工業の発展に貢献した。<sup>9)</sup>

1623年に、製造業者常設委員会 (Standing Committee for Manufactures) が毛織物製造増進のために設立された。ついで1641年、1645年と外国羊毛や油・染色原料の自由な輸入を認める法案を可決し、高級織物業を促進し、熟練労働者・資本不足に対応させようとした。そのため、熟練工には兵役義務を免除していた。

王政復古 (Restoration) の後、1661年法は1641年法を再立法化し、外国人熟練工の帰化を認可した。かくしてプロテスタント系のヨーロッパ大陸の熟練工がスコットランドに移住してきた。<sup>10)</sup> また毛織物業企業に法人格を付与して<sup>11)</sup> 市場での独占的販売権を認可した。1681年の毛織物製造・貿易促進法では、自

8) I. F. Grant, *Social and Economic Development of Scotland before 1603*, Edinburgh, 1930, p. 464ff.

9) 彼らはエディンバラのキャノンゲイト (Cannongate) 地区に住み「その国の人々に技術と知識を与えた」Clifford Gulvin, *The Tweed-makers, A History of the Scottish Fancy Woollen Industry 1600-1914*, New York, pp. 22-23. 以下の行論は本書に負うところ大である。

10) スコットランドの宗教改革については、G. Donaldson, *The Scottish Reformation 1560*, Cambridge, 1960. の他、拙評「海を渡ったスコットランド人」(『創価経済論集』2巻2号所収、1972年)の92頁「スコットランド教会の諸分裂と再結合」の表を参照されたい。

11) スコットランド議会は、合本資本公司 (joint-stock company) の設立を奨励した。スコットランド商法は、イングランド法と異なり有限責任制による企業設立は比較的の自由であった。Archibald J. Wolfe, *Commercial Laws of England, Scotland, Germany and France*, Special Agent Series No. 97 Department of Commerce Washington, 1915, pp. 18-23.

6) T. C. Smout, 'The Development and Enterprise of Glasgow' *Scottish Journal of Political Economy* VII (1960), p. 204.

7) スウェーデンは自国の織物を犠牲にしてもスコットランド産を輸入し、フランスは最終的にはスコットランド織物の輸入を禁止した。T. C. Smout, *Trade* (op. cit.), pp. 112-235.

国織物の促進のために高級毛織物の輸入を禁止し、また原材料輸入を免税とした。この法令のもとでハディントン (Haddington) に毛織物製造工場が設立された。ついで1683年にはエディンバラとグラスゴウに2工場、名誉革命後にはグラスゴウにさらに2工場、アバディーン、ムゼルバラ (Musselburgh)、ノルス・ミルズ (North Mills)、ベルウィックシア (Berwickshire)、アングス (Angus) にも工場が設立された。彼ら毛織物製造業者はスコットランド議会での発言権を強め、1701年には、彼らの要求により「国内での外国衣類の着用の禁止、羊毛輸出の禁止」が制定された。<sup>12)</sup>

しかしスコットランド政府は、経済的に圧倒的優位に立つイングランド政府に比して脆弱な財政状態にあり、また諸戦争の続くヨーロッパの国際情勢の変化に対応できず、毛織物業者の養成策も挫折し、<sup>13)</sup> ついにはイングランドとの「合併」を余儀なくさせられるに至った。

### III 合併と毛織物工業

1707年のスコットランドとイングランドの

12) *Acts of the Parliament of Scotland*, viii, 348; cited by. C. Gulvin, *op. cit.*, p. 24.

13) この時代のスコットランドの毛織物工業の挫折については、①政府は輸出入コントロールができず法令の保護策は完全には実施されなかった。②製造業者の生産規模は国内需要を満たすのに充分ではなかった。③そしてスコットランドの高級織物は、価格と品質の点でイングランドに劣っていた。④熟練工の移入獲得は、彼らへの高給保証となり、それが価格コストの上昇を招いたことが挙げられる。W. R. Scott, *Constitution and Finance and English, Scottish and Irish Joint-Stock Companies*, New York, 1951, iii, p. 152.

合併<sup>1)</sup>は、スコットランドの毛織物工業にとっても著しく重大な意味をもっていた。つまりスコットランドはイングランドと同じ商業・貿易規制に従うことになった。

イングランドの合併交渉者に関心があったのは、スコットランドの毛織物貿易ではなく羊毛貿易であった。その理由としては、先ずイングランドの織元は北ヨーロッパ市場での国際競争から原毛の絶対的不足の可能性に直面しつつあり、スコットランドの羊毛輸出貿易をコントロールする必要があった。また製品輸出においてもスコットランド諸港からの輸出は、国際毛織物市場の需要によって決定される価格をとりえたので、国家コントロールの強いイングランド諸港からの輸出よりも有利であり、国境を越えて製品を北上させる動きがあった。

それゆえにスコットランドの海外毛織物貿易には拡大の可能性も、生産品水準の向上の期待も実現できなかった。僅かにギャロウェイ (Galloway) 産の高級毛織物がイングランド市場へ入れたのみで、劣質の毛織物は対抗できず、イングランド毛織物工業の補完的な役割——植民地への廉価で劣質の毛織物販売——に専門化することになる。スコットランドの羊毛輸出は海外の織物業者の競争能力の強化に結びつくことから、同じくイングランド織元からの干渉を受けることになった。

「合併条約」は、スコットランドの羊毛・毛織物工業が著しく不利となることを予想して、若干の補償を約束していた。それは「合併条約」の第15条<sup>2)</sup>に、羊毛輸出の自由を失

1) この合併については、拙論「18世紀スコットランドの経済発展に関する一考察」(『創価大学開学記念論文集』明和印刷、1971年所収) 17—28頁を参照されたい。

なることの補償として「年額 £2,000 を、羊毛生産地域の粗毛織物製造促進のため、7年間にわたり公共基金から拠出する」ことを規定していた。

しかし現実に基金が供与されたのは、1727年の製造工業者評議会 (Board of Trustees for Manufacturers) の設立以降であり、合併後20年を待たねばならなかった。

「評議会」は、1727年12月に「粗羊毛を生産したり加工することを評議会と契約したり、またそれを紡ぐのに5人以上の労働者を雇用する人にプレミアム（割増金）を提供する」と発表した。そして翌年1月に、「評議会」は「羊毛に関する特別企画」(‘Particular Plan for Wool’) を発刊した。またスコットランド南部の羊毛生産地域では、公認の原毛撰別工 (official sorter) が認定されたが、そのような「評議会」の政策も毛織物工業の興隆には結びつかなかった。つまり羊飼育法の向上や品種改良、企業経営の革新、労働者の実質賃金の向上等が実現されなかったからであろう。そして繊維工業にあっては、スコットランド固有の産業でイングランドとは競合しない亜麻工業 (Linen Industry) が、国民的産業として「評議会」によって振興されつつあった。<sup>3)</sup>

2) An Act for encouraging and promoting Fisheries, and other Manufactures and Improvements in that part of *Great Britain* called *Scotland*, 13 Geo II, c.30 (1726) にも再明記されている。cited by. Campbell & Dow, *Source Book of Scottish Economic and Social History*, Oxford 1968, pp.70-71.

3) 亜麻工業については、次の機会にのべてみたい。拙稿前掲「18世紀スコットランドの経済発展に関する一考察」の他、C. A. Malcolm, *The History of the British Linen Bank*, Edinburgh, 1950. に詳しい。他の繊維工業との比較では、H. Hamilton, *An Economic History*

しかし必ずしも「合併」によって羊毛・毛織物工業が衰退した訳ではなく、粗毛織物 (coarse woollen) はイギリス毛織物輸出の廉価製品の補完として海外市場へ進出した。それゆえにアバディーン、エディンバラ、ガラシエルズ (Galashiels), スターリング (Stirling), キルマノック (Killmanock) を始めとして、ダンフェルムライン (Dumfermline), インベルケイシング (Inverkeithing), ダンプラン (Dunblane), ラナーク (Lanark), メイボウル (Maybole), ダンプリーズ (Dumfries), ソオンヒル (Thornhill) に工場が設立された。

スコットランドの粗毛織物輸出から観れば、「合併」以前の北ヨーロッパ市場は海外競争の激化もあって衰退したが、イギリス資本主義圏の大西洋貿易市場では著しい進展をみた。<sup>4)</sup> この新世界 (New World) への需要の対応には、2つの理由が存在した。その1は、プランテーションにおけるネグロ奴隷数の増大と、その2としての軽量の梳毛織物 (light worsted fabrics) 生産にあった。前者ではネグロ奴隷の衣服として<sup>5)</sup> 品質ではなく廉価で

*of Scotland in the 18th Century*, Oxford, 1963, pp.131-184 に、社会経済史的には W. Ferguson, *Scotland, 1689 to the Present*, Edinburgh, 1968, pp.71-101 に詳しい。

4) キルマノックはサージ織を、スターリングは装身織物をオランダへ輸出していた。またアバディーンは、くつ下輸出を行っていた。しかし18世紀中葉では量ではムゼルバラのラジャ織のアメリカ南部への輸出や、グラスゴウのタバコ商人の「格子じま織物」(tartan) 輸出の方が上廻っていた。Lindsay, *Interest of Scotland*, Edinburgh, 1773, p.106; Glasgow City Archives B 10/15, *Glasgow Burgh Court Register of Deeds*.

5) しかし次第に亜麻織物、ついで木綿製品に市場を奪われてゆくことになる。H. Hamilton, *The Industrial Revolution in Scotland*, London, 1966, pp.76-149 を参照されたい。

軽量であることが望まれていた。また後者の輸出品は、前時代とは異なり「新織物」(new draperies)と呼ばれる混毛の織物であった。都市の織元は、植民地貿易に呼応して、織物の転換を果し「ラクダ織」(camlets), 「ラシャ織」(light stuffs), 「くり毛織」(bays), 「サージ織」(serges)が生産品目となった。

合併によって、スコットランド南部の地主は羊毛販売の自由を失ない、かなりの打撃を受けたといわれる。<sup>6)</sup>しかし廉価な原毛の供給は、廉価は労働力コストと相まって、<sup>7)</sup>国内の毛織物工業者の企業者活動を刺戟した。

当時のイングランド毛織物製品は、その大半が高級品でスコットランド織物の直接的な代替ではなかった。事実、ウェスト・ライジング (West Rising) 地方は、廉価な梳毛織物 (worsted manufacture) の中心地となりつつあったが、交通・通信設備は未だ十分に発達せず地域市場のままにとどまっており、スコットランド市場には輸送費と価格高ゆえ、入ってくることはなかった。注目すべきことは、イングランド毛織物業者は、ノルウェーやロシアの農民毛織物生産価格以下では販売できず、むしろかなりの量の輸入を余儀なくされていた。<sup>8)</sup>それゆえにスコットランドの廉

価な毛織物は、イギリス国内市場でも十分に生存できえたのである。<sup>9)</sup>

しかしスコットランド織物工業に、一つの変化が生じていた。従来の北ヨーロッパ毛織物貿易の中心であった東海岸の毛織物工業に替って、スコットランド南部の羊毛供給地域が北部イングランドの毛織物工業の興隆の影響を受けて、その毛織物工業の下請に着手し始めたからである。<sup>10)</sup>つまりスコットランドの国境地方の労働者に梳毛 (worsted) の織編糸 (yarn) を紡がせ、それをイングランド移入することを開始した。さらに1734年には、ハウィッチ (Hawich) の治安判事は、「評議会」に「この地での無能な人々をイングランド梳毛製造業者の紡績工として雇用するための学校設立」の基金を要望した。<sup>11)</sup>

かくて18世紀後半には、スコットランドの毛織物工業は、粗織物を中心に全イギリス国内市場、海外植民地、少し衰えたが北ヨーロッパ大陸市場へ廉価で軽量の毛織物を輸出した。しかし、そこには、イギリス毛織物工業

6) 例えばスコットランドの黒面羊 (blackface) 毛は、1700年には1ストーン5sと6sの間で販売されたが、1720年には4sに低落している。Scottish Record Office, *Scottish Supplementary Parliament Papers*, XVII, p.94.

7) イングランド労働者に比して生産性では劣るが、労働コストは低廉であった。また田園地方では、現物支給が通常であった。Adam Smith, *Wealth of Nations* (Everyman's edition) pp. 98, 106, 173; W.R.Scott, *Joint-Stock Companies* (op. cit.), iii, p.148.

8) S.Treite, 'The Norwegian textile market in the 18th Century: *Scandinavian Economic History Review* xvii, 2, pp.161-78.

9) またスコットランド固有の織物は、緻密な梳毛 (carded) で「あや織」(twilled) の特徴をもっていた。C.Gulvin, *The Tweedmakers* (op. cit.), p.35. そしてスコットランドの人々は、18世紀後半において「教会も市場の人々も、通常国産の衣料を着用し、イングランド産よりもはるかに暖く快適である」と自負していた。Sir. John Sinclair, *Analysis of the Statistical Account of Scotland*, Edinburgh, 1831 Appendix i, p.18; J.G.Fyfe, *Scottish Diaries and Memoirs 1746-1843*, Stirling, 1942.

10) アダム・スミスの評価では、18世紀前半では、この地方の羊毛供給者は、羊毛価格の低落を羊肉の高騰によって相殺していた。Wealth of Nations (op. cit.), i, p.216. しかし18世紀後半には、北部イングランド毛織物工業への原毛供給が大きくなって来る。

11) Scottish Record Office, *Board of Trustees*, N.G., 1/1/2/93; N.G., 1/1/3/181; cited by C.Gulvin, op. cit., p.36.

の補完的役割として存在できえた事実も看過できえないのである。

#### IV 産業革命期の毛織物工業

18世紀後半のイギリスは、木綿工業が慧星のように登場して主役となり、「長老格」の毛織物工業は相対的には没落したが、にもかかわらず毛織物業はかなりの発展を示していた時代である。例えば国内の原毛供給は不足し、1792～4年の間の原毛輸入は約390万ポンドであったが、1822～4年の間には2,130万ポンドへと急騰した。<sup>1)</sup> また輸出面では、ヨークシアのウェスト・ライディングの広幅織物 (broadcloth) は1770～5年の間に年間10万反であったのが、1815～20年には33万反へと増大した。<sup>2)</sup> そこにはヨークシア織物業の興隆と、対照的に旧来のイースト・アングリア (East Anglia)、西部イングランド (West of England) 地域の衰退をみたが、この時期の毛織物工業の発展を支えたのは原毛輸入の増大にあったといえよう。

しかしスコットランド毛織物工業は、ヨークシア地域の発展に遅れることなく補完的に対応し、近代的毛織物工業の基盤を作ることになる。そして1820年代には、国境地域を中心とするスコットランド毛織物工業は、<sup>3)</sup> 羊毛

の品質も仕上げ工程も改良され、企業組織の変革にも成功した。

そこで北部イングランドの毛織物工業の影響下に発展したスコットランド南部国境地域の諸都市について、若干の考察を加えておきたい。

ガラシィエルズ (Galashiels) は、その毛織物工業の興隆には2つの理由、近隣の亜麻織物工業の衰退と織元の「評議会」からのプレミアムの獲得が挙げられる。<sup>4)</sup> その地での工場主数は、1778年の10人から1825年の35人に増大した。羊毛消費量は、17,000ポンドから500,000ポンドへ、手動織機 (hand-loom) は30台から175台へと増加した。生産毛織物 (額) は、1790年の£5,500から1825年には£58,000へと増大した。それらは主として、青色や淡褐色 (drabs) の格子縞や縦縞の織物であった。この町の発展の有様を、ワーズワース (Wordsworth) は旅行記に皮肉たっぷり「黄色い屋根の村が、町の喧噪と醜い石の家屋にとって代られつつある」<sup>5)</sup> と記している。

ハウィック (Hawick) は、ガラシィエルズよりも大きな町で、イングランドと中部スコットランドを結ぶ幹線道路路上にあり、商業上の要地であった。そこでは1730年代に、イングランド梳毛織物製造用の編系紡績が始まった。そして50年代には、地主ジェントリが地元

1) B.R. Mitchell & P. Dean, *Abstract of British Historical Statistics*, Cambridge, 1962, pp. 191-2.

2) *Ibid.*, p. 189.

3) 1784年、「評議会」は、「梳毛製造技術は、その発展は遅々としてあるが、著しい改良をみた」とのべる。Scottish Record Office, *Annual Reports of Board of Trustees*, 1784, p. 9.

4) しかしアバディーンは最高級織物で有名であった。そして市民の約1/3が羊毛加工業に関連していた。しかし生産量において圧倒的に少なく、も

はやはスコットランド織物業の中心ではなかった。W. Kennedy, *Annals of Aberdeen*, 1818, i, p. 203.

5) 毛織物製造業者は、亜麻織物製造者よりも高い賃金を紡績工に支払った。R. Douglas, *Agricultural Report of Roxburghshire*, Edinburgh, 1798, p. 212. 「評議会」からの奨励金として、ガラシィエルズの織元に1791～1829年の間、£3803が交付された。Scottish Record Office, *Annual Report of Trustees*.

6) J. C. Sharp (ed.), *Recollections of a Tour made in Scotland*, 1803, Edinburgh, 1874.

の羊毛を用いて前貸問屋制で紡績し、ダンフェルムライン (Dumfermline) の織工を招いてメリヤス類とカーペット製造に企業的に成功した。<sup>7)</sup> また 1771 年には、市参事官ハルディ (Hardie) が、毛織物下着やストッキング製造の機械編 (frame-knitting) を導入した。

毛織物製造が地方経済の中で大きな意味をもったのは、ナポレオン戦争後とりわけ 1830 年代からである。ハウィックの織物業の市場は、当初は東部や北部の漁村であったが、流行が粗梳毛メリヤス類 (coarse worsted hosiery) から軽量の毛織物商品 (soft woollen varieties) に移るにつれ、高級織物に特化した。<sup>8)</sup> この企業的成功の鍵は、レセスタシア (Leicestershire) の救貧院からの廉価な労働力の提供を得てメリヤス製造コストの削減に成功したことにあつた。<sup>9)</sup> そしてハウィックは、メリヤス類、伝統的なカーペット製造の他に「肩掛け」(plaiding)、「フランネル」(flannel)、「毛布類」(blankets) 製造で有名となった。

この時代では、ガラシエルズやハウィックの毛織物業の発展に比すと、国境地域の諸町村の発展は、さほど注目に値しない。

ジェドバラ (Jedburgh) では、「評議会」

からプレミアムを得て毛布類やウェールズ・フランドル製造を試みたが、結局織元は 2 人にすぎず、織機類では 1770 年代に比して 1828 年の方が減少することになった。<sup>10)</sup> そして 19 世紀初頭には、ハウィックのメリヤス類製造の下請企業として編入されるに至った。

さらに東部のケルソオ (Kelso) では、毛織物工業と並存して亜麻工業と木綿工業があり、1828 年には 70 台の織機があつた。<sup>11)</sup> しかしこの地方は地味が豊かなこともあり、地主資本は製造工業へではなく農業に流れた。

セルカーク (Selkirk) は、この時代にはほとんど発展がみられなかったが、その理由は厳しい封建的な町規制 (burghs restrictions) の残存が工業発展を阻害していた。1825~6 年の間、この町にはガラシエルズから移住してきた毛織物製造企業 1 社しかなかった。

ツィード渓谷のインナレイセン (Innerleithen) では、1780 年代に鍛冶屋出身の毛織物製造企業が設立されたが成功せず、結局は 1820 年代の後半にガラシエルズのツィード織企業によって買いとられた。その他、ピーブルズ (Peebles)、ランゴルム (Langholm) 等の町が散在していたが、1830 年代までは、そこでの毛織物企業は地域小市場の供給の域を出ていなかった。<sup>12)</sup>

以上に概観したように、スコットランド毛織物工業は、1830 年以前には国境地域といっ

7) R. Wilson, *History of Harwick*, Harwick, 1825, p. 252.

8) John Sinclair (ed.), *The Statistical Account of Scotland Edinburgh*, 1791-9, viii, p. 523.

9) スコットランドの救貧法が廉価な労働力供給に貢献した。イングランドの国家救貧法とは異なり、教区主体の救貧法であった。スコットランドの救貧法については Jean Lindsay, *The Scottish Poor Law, its Operation in the north-east from 1745 to 1845* Devon 1975; J. G. Smith, *Digest of the Law of Scotland relating to the Poor*. Edinburgh, 1861; Sir George Nicholls, *A History of Scottish Poor Law*, 1856, London rep in 1967 等の文献がある。

10) *Report of the Assistant Handloom Weavers Commissioners* (1839), XLII, p. 159; *Pigot Dictionary*, p. 649.

11) Sir. J. Sinclair, *op. cit.*, x, p. 576 ff.

12) 1794年に、ランゴルムの地方牧師は、「この町が享受する全ての利点を考慮すると、大毛織物工業が長い間確立されていなかったことは驚きである」と不満をのべている。Sir. J. Sinclair, *Ibid.*, xiii, p. 587 ff; xxi. pp. 245-6.



表 1 スコットランド毛織物工業の生産能力の推移 (1835~1878年)

年	工場数	紡績紡鐘数	力織機数	動力機数 (HP)	総労働者数
1835	90	—	—	—	3,505
1838	112	—	—	1,822	5,076
1847	—	—	—	—	9,637
1850	182	224,129	247	2,533	9,464
1856	196	272,225	665	2,943	9,280
1861	184	317,185	1,303	3,904	9,812
1867	193	343,068	3,418	5,942	14,760
1871	218	421,489	10,543	9,305	23,000
1874	257	529,011	11,758	—	27,728
1878	246	559,031	6,284	—	22,667

出典) 各年の議会資料 (*Parliamentary Papers*) より抽出。

(1836) XLV p.138; (1839) XLII p.310; (1847) XLVI p.294;

(1850) XLII. p.745; (1857) XIV. p.7; (1862) LV. p.23;

(1867~8) LXIV. p.453; (1871) LXII. p.440; (1875) XVI. p.220;

(1878~9) LXV. p.324.

てもガラシエルズやハウィックで発展したものの、他の町村では何らの重要性ももっていなかった。その最大の原因は、市町村の当局や地主ジェントリが毛織物製造業者の活動に保守的であったことである。<sup>13)</sup> 成功したガラシエルズには、「その町をスコットランドのリーズ (イングランドの毛織物工業のメッカ) となるように発展させようとする進取で自由な気性をもつ」<sup>14)</sup> スコット家 (Scotts) の企業者活動が見うけられた。

しかし国境地帯は、燃料不足からの生産コスト高という現実の難問題を抱えていた。蒸気機関の運転、織布の染色用の大量の熱湯、乾燥用のストーブ等には大量の石炭が必要であった。ガラシエルズには20マイル以上も離れたところから、石炭供給を仰がねばならず、その他の地域も大半は同様の悩みをかかえていた。<sup>15)</sup> まして交通・輸送網の不備から、石

炭輸送には大変な費用と労力を費やした。それゆえ心理的にも停滞気味で、農業地域からの脱皮への努力や労働力流入の現象も見られなかった。

このような明白な不利な点であったにもかかわらず、その地域には毛織物工業発展への潜在的諸条件を備えていた。

先ず第1に、この地域には動力源、洗浄 (scouring)、縮絨 (milling)、染色 (dyeing) に必要不可欠とされる豊富な水力があった。ガラシエルズは、歴史的にも「布地の洗い張り」中心地 (fulling center) として知られていた。第2には、国境地帯に散在する限られた労働力をこれらの地域に集中的に投入し効率的に編成して、工場制度の成長に向けることができた。第3には、国境地帯の地主や農業者は、羊飼育法の改良や良い品質導入に熱心な人々であった。<sup>16)</sup> 最も顕著な発明は、

13) C. Gulvin, *op. cit.*, p.44.

14) R. Wilson, *History of Hawick*, Hawick, 1825, pp.287-8.

15) 例外は、ダルケイスへの穀物輸送の復路に石炭を入手できたジェドバラであった。Sir. J.

Sinclair, *op. cit.*, 1791-9, i, p.16; ii. pp.315-16.

16) J. E. Handley, 'The Evolution of Sheep Breeds in Scotland' *Scottish Studies*, xii, 1968, p.147.

表 2 ロクスバラ (Roxburgh), セルカーク (Selkirk), ピーブルズ (Peebles)  
諸州の毛織物生産能力の推移 (1835~1871年)

年	工場数	全体での 比率(%)	紡績紡鐘数	全体での 比率(%)	力織機数	全体での 比率(%)	労働者数	全体での 比率(%)
1835	24	27	—	—	22	100	789	23
1838	32	30	—	—	—	—	1,046	20
1847	—	—	—	—	—	—	2,264	23
1850	40	22	77,000	34	109	44	2,573	27
1856	48	25	113,888	42	328	50	3,309	36
1861	44	24	160,257	51	559	43	4,042	41
1862	47	24	139,030	40	1,110	10*	5,180	35
1871	47	22	155,230	37	1,336	11	6,707	29

\* この急速な減少は、スコットランド西部のカーペット工業における力織機の急速な増大の結果である。

出典) 各年の議会資料 (*Parliamentary Papers*) より抽出, 表1の資料と同じ。

土着の焦げ茶面羊 (Dunface) の改良品種チェビオット羊 (Cheviot) であった。それは、従来の黒面羊 (blackface)<sup>17)</sup> に比して、均質で短毛、色調も華麗で工場処理にも適した繁殖力の強い多毛産の羊であった。しかも当時流行しつつあった「ち密で重厚な衣類」 (dense heavy cloths) の製造に適していた。<sup>18)</sup>

このような利点を享受して、スコットランド毛織物工業は、1830年以前にはほとんど外国産羊毛を輸入せずに、企業的に成功しつつあった。特にイングランド市場への羊肉の供給やヨークシア地方の毛織物工業への羊毛

供給の増大は著しかった。この毛織物工業の興隆は、封建遺制の残存していたスコットランド農村社会の二重経済構造を廃絶し、近代的な労働市場を形成した。「高地清掃」 (Highland Clearance) がエンクロージャー運動によって展開され、一部の拡大化された耕地に再植民されたが、大半は土地を追われ紡績や織布の仕事につく労働者となった。<sup>19)</sup> そして毛織物製造と農業労働は、次第に「さらに一層明白に、完全な分離 (最終的には) が生じてきた」。<sup>20)</sup> いたのである。

17) 黒面羊の毛は、長く粗く、比率的にも使えない髪や粗毛 (kemp) をふくんでおり、加工には不適であった。それゆえ主として手編み用、くつ下、粗目のカーペットに向けられ、イングランド織元へ原材料として販売された。黒面羊毛はほとんど技術改良をみる事がなかったか、最終的には19世紀の後半に、著名は格子縞の防水的な「ツィード織」が作り出されて脚光を浴びることになる。

18) 1828年に、ネピア卿 (Lord Napier) が、南部高地から黒面羊が駆逐されつつあるとのべ、スウゼイ (Southey) は、1851年に「スコットランドで最も著しい変化は、チェビオット羊の代替によって黒面羊が減少したことである」と残している。R. M. Hartwell, *The Yorkshire Woollen and Worsted Industry 1800-1860* Oxford Unpublished, 1955, p.24; C. Gulvin, *op. cit.*, p. 49.

19) 「高地清掃」については、J. A. Symon, *Scottish Farming past and present*, Edinburgh, 1959, pp.136-176; T. Johnston, *The History of the Working Classes in Scotland*, New Jersey, 1946 rep in 1976, pp. 290-302に詳しい。

20) Sir. John Sinclair, *op. cit.*, Edinburgh, Appendix, i, p.19. この分離を推進したのは、織物工業における機械の導入である。1790年代に手動ジェニー (hand-jennies), 水力稼動半自動式のミュール・ジェニー (water-driven semi-automatic 'mule' jennies) が導入された。国境地域では数千人の婦女子紡績工がイングランド北部織物業者によって雇用されていた。S. Pollard, *The Genesis of Modern Management*, 1965, London, p.37 スコットランド労働者は、イングランドの間屋制家内工業に吸収され、国内製造業者には賃金コストの上昇をもたらし、織布業のボトルネックとなっていた。織布工程の機械化の完成は1850年代である。

そこには著しい人口が田園地域から工業地域へ集中する動きが見うけられる。ロクスバラ (Roxburgh)、セルカーク (Selkirk)、ピーブルス (Peebles) 諸州の人口は1755年の47,600人から1831年に61,000人へと増大した。また1801年と1831年の間、ガラシエルズ (Galashels) は約50%の人口増、ハウィックは80%の人口増を示していた。<sup>21)</sup>

注目に価するのは、国境地域の農業リーダーには教会の庇護があり、牧師が一方では労働者に対して新時代の工業発展に即した工業規律への順応を説き、他方では地主や織元に経営理念を説いたことである。例えば、ガラシエルズの牧師ダグラス (Dr. Douglas) は、織物会議所 (Cloth Hall) の設立基金として、織元達に £1,000 を長期貸付するように説いた。<sup>22)</sup> しかし全般的にみて、地主が直接的に企業目的に投資することはなく、工場建物を永代借地 (feus) に認可することによる間接的な方法での援助であった。<sup>23)</sup> そしてグラスゴウ在住の毛織物商品は別として、国境地域の工場主は、毛織物業の仕上工 (fuller) や染色工 (dyer) からの出自であった。そして毛織物工場の固定資本は平均 £200~300で、流動資本はその6倍であったとされる。<sup>24)</sup> 何

故なら、羊毛は他の繊維に比して高価であり、その他の原材料、染色原料の購入、地代や賃銀の支払いの他、羊毛から販売用の織布に至るまでに数カ月の日時が必要であった。

それゆえ「小資本」と「企業者精神」から出発し、利潤の再投資による事業の拡大を展開しようとした国境地域の織元の直面する課題は何よりも金融問題であった。先ず第1に1789年のガラシエルズの織元達は、エディンバラの「評議会」に財政援助を求めた。「評議会」は、原材料や機械の購入資金や技術習得のための研修費用を支出した例もあるが、全体として少額に過ぎず、成功したとはいえなかった。<sup>25)</sup>

第2には、銀行の役割が挙げられる。諸銀行は、融通手形の割引業務を行ない信用貸システムを用いた。しかし1820年代以前の銀行の役割は、ほんの僅かにしかすぎなかった。<sup>26)</sup>

第3には同業者間の相互補助である。国境地方では1777年にガラシエルズ毛織物業者組合 (Galashiels Manufactures' Corporation) を地方織元グループで作り、織機や「おさ」(reel)を共同購入したり、「紡績機」の共有や相互の賃借を行なった。また共通の基金による貸出しや相互の信用貸も一般的であった。<sup>27)</sup>

スコットランド毛織物工業は、チェビオット羊による品質向上を用いて著しい発展をみ

21) J.G.Kyd, 'Scottish Population Statistics' *Scottish History Society*, 3rd Ser. XLIV, 1952.

22) C.Gulvin, *op. cit.*, p.53.

23) T.C.Smout, 'Scottish Landowners and Industrial Development,' *Scottish Journal of Political Economy*, XI, 1964, p.3.

24) Caledonian Insurance Co. Edinburgh, *MS, Fire Book* (1805), Policy, No. 364. 広幅織物用の飛杆コストは、1795年に平均£12にすぎなかった。大資本と多数の工場労働を必要とする木綿工業とは異なり、熟練工は節儉と勤務の精神をもって毛織物業で成功した。それゆえかつての国民的副業であった亜麻工業は、毛織物業の進展とともに、衰退に向うことになる。

25) *Annual Report of Trustees* によると、1775~1833年の間、国境地域の織元への奨励金は、年額僅か£85にすぎなかった。

26) C.Gulvin, *op. cit.*, p.62.

27) 例えばガラシエルズの織元ヘンリー・ブラウン (Henry Brown) は、1828年の3月から1829年の12月の間、地域の同業者に70回ぐらい、数シリングから£40の幅で計£540を貸し、同期間に同方法で£340を借りていた。全ての負債は、無利子で、1, 2週間あとに決済されている。また融通手形は、貨幣同様に流通し、しば

表 3 ガラシエルズでの毛織物生産能力と販売高の増大 (1825~1886年)

年	手動織機数	力織機数	刷毛機数	紡績紡鐘数	毛織物販売額 (時価)
1825	—	—	—	—	£ 58,000
1829	—	—	—	—	£ 26,000
1832	175	—	—	—	£ 30,000
1838	265	—	22	—	—
1840	—	—	25	—	—
1843	—	—	28	—	—
1845/6	563	—	36	5,336	£200,000
1853	—	—	39	—	£250,000
1863	600	295	60	—	£490,000
1865	—	—	65	—	—
1869	—	—	76	66,825	£570,000
1886	402	1,085	114	94,562	£1,000,000

出典) D. Bremner, *The Industries of Scotland*, 1869 rep in 1969, Chap. on Woollen Manufactures pp.155-163; Chambers, R. & W. *Gazetteer of Scotland* (1883). section on Galashiels; J. H. Dawson, *A Statistical History of Scotland*, Edinburgh, 1853, pp.988-90; *New Statistical Account of Scotland*, iii, Selkirk, 11 ff より作成.

た。毛織物輸出額をみると、1760年代と1780年代の間、年平均£2万(公統計)であったが、ナポレオン戦争後は£5万に達し、1820年代後半まで続いた。

これらの発展にもかかわらず、1820年頃には、阻害的な諸要素が生じてきた。

先ず第1に、スコットランド毛織物のイングランドのそれとの品質較差に架橋するのに役立っていたチェビオット羊毛が、大量に刈毛したことから品質低下をきたし「高級織物」製造に不適となってきた。それに反して多量の原毛がドイツ、スペインから輸入されるようになった。イギリス全体の外国産羊毛の輸入額は、1816年の750万ポンドから1830年の3,230万ポンドへと増加した。特にヨークシアの毛織物業者はチェビオット羊毛の輸入を止めて外国産羊毛に転換し、スコットランド産

よりも上質の軽量の毛織物製造に成功した。

そして第2には、スコットランドの羊飼育者の側では、羊肉増産に熱心となり急速に飼育させることに専念したため、羊毛は不均質で貧弱で長毛となり、質は悪化した。<sup>28)</sup>

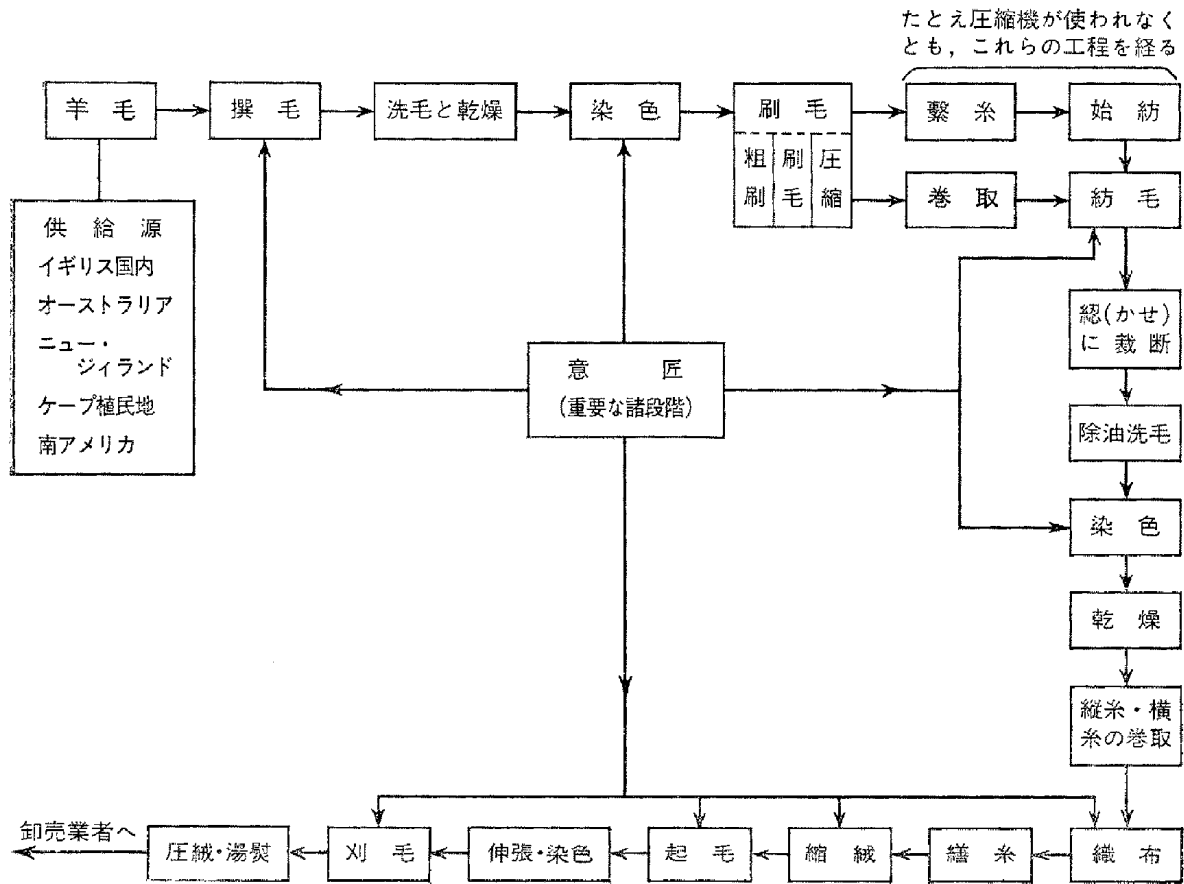
スコットランドの毛織物業者は、新しい条件に適合して外国産の羊毛を用いることに試行錯誤したが、その多くは技術・企業組織においてイングランドの対抗的な業者に劣ることから、ヨークシア織物との対抗は断念した。1828年の特別会議で、ガラシエルズの織物業者は「高級織物には適合できないが、廉価で勝負」<sup>29)</sup>を決定し、再び補完的な劣質毛織物に専念することにした。そして具体的には、くつ下、メリヤス類(hosiery)、廉価な格子縞肩掛け(cheap plaiding)、ランチャ服の着替

28) Scottish Record Office, *Report of the Special Committee of the Board of Trustees on Premiums*, 1830, p. 28.

29) Craig. Brown, *Account Book (op cit.)*, 14, Feb. 1829; C. Gulvin, *op. cit.*, p. 68.

しは裏書譲渡されていた。Craig-Brown, *Account Book of Galashiels Weavers' Corporation*, 1908, passim; *Ibid.*, p. 63.

図1 1860年代のツイード織製造の主要工程の説明図



たとえ圧縮機が使われなくとも、これらの工程を経る

え (duffle) 等であった。

### V 19世紀後半の毛織物業

#### ——ツイード織の登場——

1829年は、スコットランド毛織物の歴史的転換点であった。つまり経済危機の年であり伝統的な青色織物 (blue cloth) はロンドン市場で衰退しつつあったにもかかわらず、後代にツイード (tweeds) 織<sup>1)</sup>と名聞を馳せた新織物が登場したからである。この新織物は、織

物デザインからみて革命的 (revolution) というよりは改革的 (evolution) な製品であった。

前ツイード織時代をみると、19世紀の初めになると国境地帯の羊飼い達は、彼らの制服のように「黒白弁慶縞のラシャ織」 (black and white checked plaid) を着用していた。それは土着の羊毛を紡ぎ天然色の美しい黒白模様をおび、1820年代から増加しつつあった旅行者が旅行着兼土産品として歓迎しつつあった。<sup>2)</sup> また他方、スコットランド高地地方

1) ツイードの語源について述べておく。元来、スコットランドの織物は「あや織」(twilled)で、スコットランドでは'tweel'と綴っていた。1830年代中頃、スコットランド生れのロンドン呉服商ロック (Locke) の店で働いていた店員が、'tweel'という語を読み間違えて'tweed'と写した。何故なら、その織物がスコットランド南部の tweed 河流域に起源をもつことを知っていたからである。それ以降、この店では'tweed'を便宜的に用いた。その後、'tweeds'と

して普及し、1840年代の初めに一般にも定着した。B. Wilson, 'The Industrial Development of Hawick' *Transactions of the National Association for the Promotion of Social Science*, 1953 に詳しい。

2) Craig Alexander, 'Reminiscences of the Tweed Trade' *Border Advertiser* 9, Dec. 1874; *The Early Stages of the Tweed Trade' Ibid.*, (20, Oct. 1875).

表 4 H・バラントイン社\* の毛織物販売の動向 (1833~1850年)

年	グラスゴウ 市場へ	エディンバラ 市場へ	ロンドン 市場へ	総販売高概数
	£	£	£	£
1833	34	158	—	200
1834	75	256	—	400
1835	148	358	230	800
1836	797	303	651	1,800
1837	874	615	520	1,700
1838	4,158	537	222	6,100
1839~40	—	—	—	—
1841	2,040	2,112	545	4,800
1842	1,650	6,413	43	8,400
1843	2,357	5,206	66	8,100
1844	3,039	6,421	181	10,100
1845	5,746	8,490	286	14,899
1846	4,488	10,700	357	16,500
1847	3,843	2,921	1,888	9,600
1848	2,478	2,000	2,420	7,400
1849	3,036	1,876	2,471	7,600
1850	907	2,306	7,247	11,000

\* ガラシィエルズとウォルカバーンに工場をもっていた。

出典) Edin. Univ. Lib. MSS. Gen 921, *Day Books of H. Ballantyne* (1844-50);

Cited by C. Gulvin, *The Tweed makers, A History of the Scottish Fancy*

Woollen Industry 1600-1914, New York, 1973, p. 87.

(Highlands) の伝統的織物のタータン (tartan) 織が、ジャコバイトの乱 (1745年) 後の禁令も条件付で解かれ (1780年), その地の人々の衣服として定着しつつあった。

この羊飼いの黒白模様 (shepherd-check) 織物とタータン織物の流行の結合は、スコットランドの装身織物 (fancy trade) の発展の骨髄 (kernel) となり、1830年代を境界として旧来の青・灰・茶褐色の習慣的 (customary) 織物にとって代る。

この流行品を創り出したのは、グラスゴウの商人達であった。<sup>3)</sup>アレクサンダー・クレイグ (Alexander Craig) は、青と茶褐色の格

子縞の広幅織物をロンドン市場で広告した。ロンドンの王室御用仕立服屋ジェイムズ・ロック (James Locke) が、白黒格子縞の毛織物を販売した。<sup>4)</sup>そして1830年代後半には、ガラシィエルズの毛織物製造業者も黒・白、黒・茶、黒・緑の格子縞織物を製造した。ジェドバラでも各種の格子縞織物、膝掛、肩掛製造に着手した。特にロックは、ヴィクトリア女王のスコットランド訪問に際して、巨大な「暗紅色格子縞」(Murray tartan) 織物をつくり、それを「ヴィクトリア」模様と登録した。そこから「一族織物」(Dress Clan) 模様が波及することになった。そしてまた国

3) このファッション革命のリーダーは、ウォルター・スコット卿 (Sir Walter Scott) で、彼が1826年に羊飼いの黒白格子縞の布地をズボンに着用し、上流階級に普及したことに始まる C. Gulvin, *op. cit.*, p. 71.

4) 彼は、アバディーンのコロムビーズ (Crombies) 社をはじめ、ピーブルズ (Peebles) やバノックバーン (Bannockburn) の羊毛紡績会社と特別契約をしてロンドン市場で販売した。 *Ibid.*, p. 71.

表 5 ヒルフーツの毛織物生産能力の推移 (1835~1871年)

年	工場数	全体での 比率(%)	紡 鐘 数	全体での 比率(%)	力織機数	全体での 比率(%)	労働者数	全体での 比率(%)
1835	—	—	—	—	—	—	865	25
1838	—	—	—	—	—	—	1,410	28
1847	—	—	—	—	—	—	3,295	34
1850	45	25	72,095	32	38	16	3,669	38
1856	43	22	73,445	27	141	21	2,644	28
1861	38	21	71,261	22	278	21	2,297	23
1867	30	15	111,370	32	728	21	3,734	27
1871	33	15	143,516	34	715	7*	4,123	18

\* この年の最大の低落の原因は、スコットランド西部のカーペット工業の急速な拡大の結果である。  
出典) 議会資料 (*Parliamentary Papers*) より抽出, 表1と同じ。

境地域を中心に、「地域格子縞織物模様」(District Checks) も生まれた。<sup>5)</sup> このスコットランド毛織物の成功は、三つの特徴、巧妙な配色、天然の強靱な羊毛、織柄の独自性等の諸要素が挙げられる。製造工程においても、弾力・伸縮性ととみ色調もはっきりとさせるために、縮絨機操作も工夫された。<sup>6)</sup>

1840年代には、スコットランドのツイード織は、ヨーロッパのファッション界でも有名となりツイード=高級織のイメージに成功した。1856年に毛織物商バラントイン(H. Ballantyne)は、「我々の最大の強味は品質である」との手紙を、工場へ送っている。<sup>7)</sup>そしてヴィクトリ

ア女王について夫君アルバート公愛用の「バルモラル」(Balmoral) タータンに刺戟され、スコットランド地主、貴族さらに所得水準の向上による熟練工の日曜日用の服として、ツイード織衣服は普及した。<sup>8)</sup>また1867年のウェールズ皇太子(Prince of Wales)のツイード織スーツ姿は、イギリス人貴公子の象徴であった。そしてイギリス人下層労働者はヨークシア産の疑似ツイード織(immitation tweeds)を競って着用するに至った。つまりツイード織は、19世紀後半のイギリス資本主義の輝く時代の誇らしきイギリス人生活の象徴の一つとなったのである。

毛織物工場の数は、1835年の90社から1874年の257社へ増大した。その間、羊毛紡績能力は2倍となり、50万鍾に達した。また織布工程も1860年代以後は急速に機械化が進んだ。かくして毛織物製造年額は、1828~29年の£2万6千から1853年の£25万、さらに1870年には£60万、1880年代初めには約£100万に達した。これらの毛織物生産は、国境地

5) この地域格子縞織物は、地域の社会経済変革から生じたもので、伝統的な家族主義格子縞織物と直接の関係はなかった。S. E. Harrison, *Our District Checks*, Edinburgh, 1967 *Scottish Woollens*, Edinburgh, 1956 に詳しい。例えばグレンヌカルト格子模様(Glenurquart Check)は、多くの装身織物の参考となったが、その地の貴族の愛好が借地人、猟官、代理人等に普及した結果である。

6) ツweed織は、ヨークシアの稠密に織られ、重縮織された剛直なカシミール織と対比すれば、イギリス貴族のレジャー着に向いていた。またヨークシアでも模倣的「ツイード織」を製造したが、原料に再製毛糸(shoddy)や再生毛糸(mungo)を用いており、スコットランドのツイード織には比較にならなかった。C. Gulvin, *op. cit.*, p. 77.

7) Henry Ballantyne to Messrs, Wilson & Armstrong, 17 July 1856, Edin. Univ. Lib. MSS. Gen 921 Letter Box ii; *Ibid.*, p. 78.

8) D. Lock, *Essays on the Trade & Manufactures of Scotland*, Edinburgh, i. p. 128.

表 6 国境地域の手織工の平均粗週賃金の推移 (1793~1850年)

	シリング	ペンス	シリング	ペンス
1793	8	0	9	6
1794	7	6	10	0
1829	12	0		
1830~32	15	0	18	0
1833~35	13	0	17	0
1836~38	12	0	17	0
1846~48	14	6		
1849~50	12	0		

出典) Royal Commission on the Depression of Trade and Industry, 1886, 1st Rept., *Parliamentary Papers* (1886), XXI, p.110.

域に集中し、1856年と1867年の間、全工場数の約1/4、紡績高の51%、織布高の43%、工場労働力の41%がそこに集まっていた。その中心地は、ガラシエルズであった。

そこには19世紀前半とは異なる毛織物工業の分業化も進展しつつあった。顕著な生産地域を追ってゆくと、オーバ・コートはアバデューンのクロムビイ社、最高級のツイード織はセルカークのロバート社、軍関係のタータン織はバノックバーンのウィルソン社、高級カシミール・ラシャ織はエルジンのジョンストン社であった。

19世紀後半のスコットランド毛織物工業の中心地についてふれておきたい。ガラシエルズは、1830年代初期に供給量を上廻る需要を受け、30年代後半の不況期にも製造高を伸ばして「全毛織物工業地域の中の最盛地」<sup>9)</sup>となった。そして1850年代には数多くの工場設立のゆえに利用できる水力は涸渇し、毛織物業者は上ツイード渓谷(Upper Tweed Valley)のピーブルズ(Peebles)やインナレイテン(Innerleithen)やセルカーフのエトリ

ック河(River Ettrick)流域、さらに西に向かって、ダンフリズ(Dumfries)のランゴルム(Langholm)に土地を求めた。

ハウィックは、1830年代からツイード織物に転化し、メリヤス・くつ下製造から毛織物紡績・織布業に移った。そして毛織物総販売高は1850年代の年間£35000から1872年£81000、1873年の£126000へと上昇した。

このように、往年の粗毛織物(coarse cloth)生産のメッカであったガラシエルズやハウィックが、ツイード織生産増大の中心地となった。またジェドバラもくつ下製造からツイード織に転換して成功した。またランゴルムは、木綿工業を凌駕してツイード織に移行し、1869年頃には約£13万の資本投下がなされ、1870年には年約£20万の生産高となった。<sup>10)</sup>

その他、19世紀中葉に女性用タータン織で名声を博したのは、サージ織や毛布・肩掛けの産地であったヒルフーツ(Hillfoots)である。そこには、アロア(Alloa)地方の工場数の1/4、紡績能力の1/3、工場労働力の1/3が集中していた。

以上を概括的にのべると、スコットランド毛織物工業は、蒸気汽閥が導入された1830年代から急速に成長し、特に1850年以降に発展を加速して1880年代まで続いた。その間、1847~48年の経済危機による財政難の時代には、若干の毛織物業者は鉄道建設投資にとりくみ、交通革命からの恩恵を享受した。また1857年の財政パニック、1861年の南北戦争時には、毛織物販売も激減したが、1870年代には回復してヨーロッパ大陸、アメリカに輸出量

9) Report of Handloom Commission, 1893, XLII, p.159; C.Gulvin, *op. cit.*, p.87.

10) D.Bremner, *The Industries of Scotland*, 1869 rep in 1969, p.157.



表7 H・バラントイン会社の毛織物労働者（常雇）の平均純所得  
(1850~1879年)

年	手織工(男) (ガラシエールス)		力織機織工(女) (ウォルカーバーン)		全労働者	
	シリング	ペンス	シリング	ペンス	シリング	ペンス
1850~52	13	7	—	—	9	3
1852~54	15	4	—	—	10	0
1854~56	20	3	—	—	12	6
1856~58	10	10	—	—	12	10
1858~60	19	7	11	8	14	0
1860~62	19	10	11	1	13	10
1862~64	21	8	12	9	15	3
1864~66	22	7	13	2	15	9
1866~68	20	10	12	10	15	0
1868~70	—	—	13	6	13	9
1870~73	—	—	11	7	14	1
1873~76	—	—	12	10	17	8
1876~79	—	—	13	11	17	4

表8 イギリス毛織物工業の諸地域（各部門）  
の個人平均年賃金の比較（1885年）

ドウズベリ（衣用生地）	ポンド 39
ハダスフィールド	39
ハリファックス	38
ドウズベリ（毛布）	36
スコットランド（ツイード織）	35
リーズ地域	35
スコットランド（肩掛け）	34
西部イングランド	31
スコットランド（ワイシャツ地と毛布）	31
ウェールズ	30
スコットランド（織糸）	26
アイルランド	21

出典) Returns of Wages in the Textile Industries, *Parliamentary Papers* (1889), LXX, 843, C-5807, xiv.

を拡大した。1880年代初め、毛織物生産価格は£400万以上に達し、それは総イギリス毛織物生産の10%を占めた。つまり18世紀にはイギリス毛織物工業のメッカ、ヨークシア織物工業を廉価・劣質で補完的役割を果たしていたスコットランド毛織物工業が、ツイード織物によって立場を逆転し、イングランド毛織物工業を高価・高級質で補完的役割を果たすよう移行したのである。

## VI 結 び

先ずスコットランド毛織物工業は、スコットランド繊維工業の中でも最も成功した企業であり、それは「ツイード」織が今日でも高級毛織物の代名詞となっていることから分りえる。亜麻工業は18世紀スコットランドの国民的産業として奨励されたが、木綿工業に凌駕されて衰退し、地域特化として一部に残存したにすぎなかった。また木綿工業は、イングランドのその補完的役割として廉価・劣質の木綿製造で19世紀中葉には著しい興隆を示したが、イギリス世界資本主義の木綿製品市場での覇権も後進諸国の工業化によって失われるにつれて、低滞・衰退となってゆくことを余儀なくされた。

そこでスコットランド毛織物工業の成功因についてまとめておきたい。特に国境地域の毛織物工業者を対照に経営 (management), 危険負担 (risk-taking), 技術革新 (innovation) 等の企業成功の普遍的条件の説明とし

て、コール (A. H. Cole) の企業者活動の行動評価を指標としたい。<sup>1)</sup>

彼は6つの指標を提示している。

- (1) 効率的な施設や設備の獲得と新しい状況に適合しうる能力
- (2) 労働者との効率的な諸関係の維持
- (3) 十分な金融資源の獲得と保持
- (4) 原材料の十分な、かつ着実な供給源の獲得
- (5) 生産物に対する諸市場 (国内と海外) の拡大と消費者需要に見合うか、また見越す新生産物の考案
- (6) 公共当局 (public authority) や社会との良好の関係の保持

(1)についていえば、毛織物工業に必要な豊富な水力と原材料 (木材) を獲得しうる地理上の利点に位置し、さらに前述のように機具の共同使用による効率的な運用を計っていた。また1830年代のツイード織を誕生させるため、いち早く羊飼いの用白黒格子縞模様とターン織の結合をなすとげ、流行に対応するかたちで生産・販売量を拡大した。例えば、1890年頃、ガラシエルの販売量の75%は、アメリカに向けられていた。<sup>2)</sup> ついでアメリカが高率保護貿易関税が施行されると、ヨーロ

ッパ向けに織柄を転換し、輸出した。また20世紀に入ると、イギリス同様の消費パターンをもつカナダ市場への輸出を奨励した。<sup>3)</sup> このように市場生産に先見の明をもって対処していたといえよう。

(2)については、一方ではスコットランドの封建的遺制を除去しつつ近代的な労働市場を創出しつつも、他方では共同体社会ルールを用いて効率的な労働者の使用を計った。また国境地域に散在していた人口を、ガラシエルズやハウィックに誘引して労働力市場を創出したことも成功因であった。<sup>4)</sup> また婦女子労働の雇用も追加されよう。<sup>5)</sup> それゆえスコットランド労働者の賃金は、高級織物生産にもかかわらず比較的安く維持できたことが表8からも分りうる。

(3)については、木綿工業の大規模な投資とは異なり、先ず小資本からの出発、勤勉による成功が毛織物工業に顕著であったことである。ガラシエルのバラントイン社も、ハウィックのワトソン社も、本人や近親者からの固定資本の供給と利潤の再投資による内部金融、もしくは同業者用の相互金融を介して、

3) *The Scottish Wollen Trade & Foreign Tariffs*, Hawick, 1903, pp. 10-12.

4) 例えば、毛織物工業地域の人口急増は著しく、1811年から1881年の間、ロクスバラシアは37,230人から53,442人に、セルカークシアは5,889人から25,564人に上昇した、また都市ではガラシエルの986人から15,330人に、ハウィックは3,688人から16,184人にと増加した。その大半が周辺地域からの流入であったとされている。 *Census Returns, Scotland*.

5) 力織機の導入によって、手織工男子の半分の賃金で婦女子を雇用できた。表7に詳しい。注目を要するのは、そのような紡績・織布工場の多くが、スコットランド内部ではなく、イングランド北部の繊維業者のイニシアティブで設立されたことである。つまりイングランド資本のスコットランドの国境地域労働者の乞振過程であった。

1) A. H. Cole, 'The Study of Entrepreneurship; A Tribute to Edwin F. Gay' in H. Aitken ed., *Explorations in Enterprise*, H. U. P. 1965, p. 35; A. H. コール著、中川敬一郎訳『経営と社会——企業者史学序説——』(ダイヤモンド社、1973年)、またコールの手法をいた拙稿「スコットランド重工業にみる企業者活動、1870~1900」(『ヒストリア』大阪歴史学会、1969年所収)を参照されたい。

2) *Glasgow Herald*, 6, Oct. 1913. またアメリカでの販売は価格・品質の維持を目的に、「スコットランド組合」(Scotch Syndicate) と呼ばれる特権商人組織を通じて行ない、独占的な利益を享受していた。 *Textile Mercury*, Apr. 1891, p. 325.

資産の増大に成功した。例えばバランタイン社の資産は、1849年と1854～55年の間に倍増した。<sup>6)</sup>毛織物工業は、資本の有機的構成の大きな木綿工業とは異なり、限定した企業規模内で、限定した商品市場内で成功しえたといえよう。

(4)については、ツイード織の成功が、スコットランド国産の黒面羊・チェビオット羊による原毛供給に依存していたことが挙げられる。しかし19世紀後半には、廉価で良質の植民地毛(オーストラリア・ニュージーランド)産原毛が大量に輸入されるに至った。<sup>7)</sup>しかし、この点でもガラシエルのサンダーソン・マレイ (Sanderson & Murray) 社は、先手を打って羊毛輸入商として成功し、1860年代中頃には、その類で世界最大の会社となった。<sup>8)</sup>そして国境地域の毛織物業者はサンダーソン・マレイ社を通じて、上級の原毛を用いることができたのである。<sup>9)</sup>

6) C. Gulvin, *op. cit.*, p.128.

7) 1843年には、植民地産の原毛価格がスコットランド国産毛価格を下廻っていた。Robert Boyd, 'On the Woollen Manufactures obtained from the Wool of our Mountain Sheep,' *Transactions of the Highland and Agricultural Society*, 1843-5, pp.134-5.

8) 1844年マレイ (Murray) は、地方製造業者から廃毛 (waste wool) を購入しヨークシアへ売却することから事業を始め、1850年ロンドン市場へ進出し、ついでドイツのハンブルグにも事業所を開いてハンガリー、ポーランド、ボヘミアの羊毛を購入するに至った。一方サンダーソンは、ニュージーランド、オーストラリアに代理店を開いた。そして両者は合併して最大の羊毛取扱業者となった。C. Gulvin, *op. cit.*, p.115.

9) 1840年代の中頃、ガラシエルズで消費される羊毛の95%は国産であった。New *Statistical Account of Scotland*, iii, Selkirk, p.21. しかし1850年代の初期には、「そこで消費される羊毛の95%は輸入される」に至った。J.H. Dawson, *Abridged Statistical Survey of Scotland*, 1853, p.988

(5)については、正にツイード織の誕生がイングランドのヨークシア毛織物工業の副次的補完的役割にすぎなかったスコットランド毛織物工業を蘇生させたように、それを新生産物の考案として定義できよう。また技術導入には積極的で、生産量の増大とコストの低減化に努力した。最も顕著な技術革新は、1830年代に水車大工メルローズ (John Melrose) によって発明され、60年代に圧縮機 (condenser) の普及によって完成された繕合機械 (piecing machine) である。この発明と実用化の背景には、アメリカ移民からの工作機械の情報提供と幾多の失敗があった。その後アメリカ・カナダ・ヨーロッパ市場に数多くの新柄 (送先向きの織物) を、輸出した。

(6)についていえば、スコットランドの国民服でもあるタータンと格子縞の柄様織物であり、地方諸当局もその着用を奨励したことから、地方当局と織物業者の関係性は良好であったといえよう。またスコットランド社会の方も、地域模様柄を社会組織の効率的運営に利用していったといえる。

以上のように、A. H. コールの指標を用いてスコットランド毛織物工業の成功諸要素を評価してみた。次に敢えて消極的評価を加えてみたい。

スコットランド毛織物工業は、19世紀後半には、ヨークシア織物業者の大規模工場生産に対抗することはできず、最大の需要ともいえる政府注文の大半を失なうことになってゆく。つまりイギリス毛織物工業の高級織物として市場を拡大したが、量では全く相対的に減少しゆくことを余儀なくされたからである。

また、資金供給の面でも家族企業にとどまり、銀行業も長期的な資本供与の役割を果さ

なかったことから、<sup>10)</sup> 企業規模の拡大にも消極的であった。毛織物企業主も、次第に彼らの利潤を投資に向け、特に1880年以降は高利潤を生む他企業株式の購入やオーストラリア鉱山のような植民地投機に進出した。<sup>11)</sup>

結論をいえば、スコットランド毛織物工業は、18世紀のイギリス織物工業の廉価部門を分業とする封鎖的な地域内市場の段階から、産業革命期にはイングランド北部毛織物工業者の企業者活動に対応して発展し、国境地域に新しい毛織物工業地帯を形成した。そしてスコットランドの産業革命の過程で、亜麻工業が衰退したのに対し、毛織物工業は木綿工業とともに著しい発展を示し、のちには木綿工業をも凌駕して残存するに至る。元来、ス

コットランドの製品は、木綿も鉄製品もイギリス資本主義の廉価・劣等分野にあったが、<sup>12)</sup> 毛織物工業に関してはツィード織によって高価・高級分野を補完的に荷ないつつ成功することになった。

そしてイギリス世界資本市場において、ツィード織は他のスコットランド国民産物のウイスキーと共に名声を博すに至った。勿論この偉業は、世界中に雄飛していったスコットランド人移民の活躍によっても裏づけられていたのである。<sup>13)</sup>

10) 銀行はスコットランド毛織物業者に流動資本供給として6カ月の信用貸が習慣であった。満期になると4カ月手形が受けとられ、2.5%の割引がなされた。 *The Financial & Commercial Supplement*, 21, May 1906.

11) *Investment Journal* (1902-5) and *Private Investment Ledgers*, 'Letters to 1880s', *Johnston Archives*; C. Gulvin, *op. cit.*, p. 129.

12) 木綿工業の劣等質については、技術面でも常にランカンア機械製木綿工業の追従にあったためである。 R. H. Cambell, *Scotland since 1707, The Rise of an Industrial Society*, Oxford, 1950, p. 111.

鉄製品については、拙稿「19世紀スコットランド鉄企業の一研究」(『大阪大学経済学』20巻2号所収)、「19世紀スコットランドの鉄工業——グラスゴウの鉄輸出市場を中心にして——」(『創価経済論集』2巻1号所収)を参照されたい。

13) スコットランド人移民については、拙評「海を渡ったスコットランド人」(G. Donaldson, *The Scots overseas*, Robert Hall, 1966. 『創価経済論集』2巻2号所収)を参照されたい。

※本稿は、文部省科学研究費昭和52年度一般研究(D)の一部であることを付記しておきたい。

(昭和53年3月20日受付 創価大学助教授)